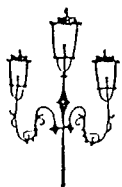


三重大学 『学園だより』 '91. No.110

研究紹介

「東洋のしるし、西洋のしるし」に出席して

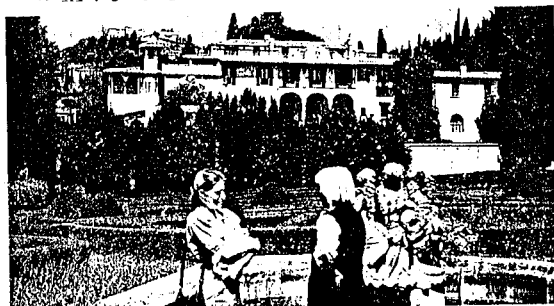
稲賀 繁美



パリからの夜汽車は、夜が明けるともう五月の青々としたロンバルディア平原を走っている。窓ごしに見える山並みには、その頂きのあちらこちらに壊れた古城が現れては消えて行く。マンゾーニの世界だ。瑞々しい朝の光のなかで、かえってやるせない倦怠感だよう朝のコンパティメント。それもやがて周囲にトスカナの山並みが迫ってくると、車輪の響きまで何とはなしにスタッカートになって、耳に甲高く響き始め、乗客たちもようやく気を取り直して身づくろいに取り掛かる。ほどなく列車はフィレンツェ中央駅に滑り込む。

一年ぶりの花の都。指定された宿ナテルロはウフィッチ美術館のすぐ隣、アルノ川に面したバルコニーからはポンテ・ヴェッキオの雑踏がすぐ下に見える。A Room with a View (プラス車の騒音)。UNESCOとTRANSCULTURA共催のシンポジウム『東洋の印・西洋の印』(ああ月並み)に引っぱり出されての出張である。会場は、市街を一望に見下ろすフィエゾレの岡中腹は、スキファノイアなる離宮。ポッカチオがベストを逃れて『デカメロン』を書いた廃園だと縁起にあるが、さすが腐っても鯛。ヨーロッパ大学院大学の所有になる、この憂いヴィラに、世界各地から「有識者(?)」が招かれて雑談する。ご挨拶の儀式にすぎないのは例のごとくだが、知識人社会が仲間意識を持つヨーロッパでは、こうした機会に得られた知己は大切な「文化資本」、そもそも「国際交流」と大仰に言っても所詮は個々の友情の網の目だ。案外共通の友人が居るもので、UNESCO要人の小説家アンリ・ロベス氏(コンゴ)などとは、小生の旧師を「話のさかな」に、初対面から意気統合した。

文学と美術の二部門からなる会議のうち、前者は温厚なる名「記号学者」アラン・レー、後者は「少しイカレタ」前衛美術運動仕掛け人ピエール・レスタニが主宰。ともに旧知の仲だが、ふたりとも頭脳明晰・言語明瞭、百戦錬磨の士。内輪の酒席での議論ならともかく、公の場でマイク越しに彼らの(名人芸的な)母国語に伍してやり合うのは、とても「国際感覚皆無」の小生には無理というもの。日本における前衛芸術からポスト・モダンへの脱皮を、芸術対装飾という概念の文化負荷性を止揚する試みとして説明した(意味不明ですみません、これ一応「研究紹介」です)。成り行き上『ル・モンド』の美術記者フィリップ・ダジャンとボンビドー・センターの「日本の前衛展」批判に及ぶと、レスタニ曰く、「お前、俺より過激だ」(無茶だ、ということ)。



フィレンツェスキファノイアの離宮

今回バラツツオ・ヴェッキオでは、パリ在住の中国人画家ザウォーキーへ「ピカソ賞」が贈呈された。外交辞令とはいえ、いささか「東洋」からの「援護射撃」もできたから、ほどほどに義務は果たせたとばかりに、夜の宴会では地酒にうつつを抜かす。ドゥオーモの見えるテラスに陣取って、東西の若き知的戦士たちと飲み交わすのは楽しい。最近アヴィニョンやパリで勇名を馳せている詩人・画家・演出家、ヴァレール・ノヴァリナや中国の若手作家ヤーディン(なぜか四方田犬彦によく似た、翔んだ才人)などと激論深宵に及ぶと、久々にヨーロッパに居る解放感に満たされる。『呑んだ真珠』(且敬介訳)の亡命小説家セベロ・サルドゥイ(キューバ)とは連詩まで巻く仕儀に至り、東西の出会いと擦れ違いとを男女(?)の悲恋に託して歌ったりもした。

学会閉会后、再び夜汽車にゆられて翌朝着いたパリでは、午後、郊外のオーヴェール・シュル・オーワーズで、没後百年記念行事の一環として「ヴァン・ゴッホと日本」を一席。講演の後、主催者経営のベニッシュ(石炭運搬船)を改造した水上レストランでシャンパンを抜き、オーワーズ河上の宴。おりからの大雨雷が夏の到来を告げる。一期一会。ささやかながら三重大学の国際親善のお手伝いもできた次第。拙い報告ながら、身勝手に許して下さった皆様に改めて感謝を込めて。

(いなが しげみ 人文学部・助教授)

89 2
90 2
91 3
92 4